

東京医科大学病院「患者さま図書室」を開設して

遠藤 典子*

東京医科大学図書館

I. はじめに

インフォームド・コンセントやセカンド・オピニオンの普及に伴い患者自身が自分の病気の情報や治療方法などを知りたいという医療情報のニーズが高まっている。またメタボリックシンドロームに代表される慢性疾患予備軍も増加し、自分の健康は自分で管理することをせまられている人も多い。病気の症状や治療方法、予後など正確な情報を知りたいという患者やその家族を支援するために医療情報を提供する「患者図書室」を設置する病院が増えている。

東京医科大学病院（以下、当院）でも2006年6月1日に病院長直属の施設として「患者さま図書室」を開設した。開設にあたり病院敷地内にある東京医科大学図書館（以下、医学図書館）が先行図書室の事例^{1), 2)}を参考にしながら利用者の方々に少しでもよりよいサービスを提供できるように協力した。開設から8ヶ月を経過し、これまでの経過と現状、今後の課題について報告する。

II. 「患者さま図書室」について

1. 概要

当院は2004年度実績で病床数1,091床、入院患者一日平均898.2人、外来患者一日平均2,667人の首都圏にある大学病院である。「患者さま図書室」は医局棟の一部であるが病院外来2階から医局棟への渡り廊下の正面にあり、利用者の利便性は比較的よい。従来の看護専門学校教員控え室を改修し設置した。

面積が15m²と狭いため、必要最小限度の機器・書架・備品、資料の備え付けとなった（表1）。

2. 開設と協力までの経緯

2004年12月に公になった東京医科大学病院医療事故

表1. 「患者さま図書室」概要

面積	15 m ² (カーペット敷き)
設備	カウンター1式 閲覧机2台 補助イス3脚 利用者用パソコン1台 業務用パソコン1台 プリンター1台 複写機1台 書架3連
資料	図書約600冊 各種パンフレット
利用	開館時間10:00～16:00 (月～金) *

の当院からの謝罪を受け入れるにあたり、遺族側から2005年7月に病院側に対し再発防止に向けた10項目の提案が示された。その中に「患者のための医療情報図書室の設置」の項目があり、当時の病院長より図書館長に協力要請があった。

以前より医学図書館に一般の方や外来・入院患者の方、その家族の方などからの利用の問合せが多くあったが、患者向け資料がないこと、医学図書館が当院の建物とは別にあり、利用者にとって建物の構造上利用しづらいこと、カルテや書きかけの症例報告など個人情報に関する資料の置き忘れなどもあり、学生・教職員と同じ医学図書館を使用するには問題があること、スペース的にも共用するには無理があるなどの理由で心ならずも患者の利用を制限してきた。このような状況もあり、常日頃我々医学図書館員も専門家向けの医学図書館とは別に患者・家族の方々が医療情報を入手できる図書室の必要性を強く感じていたのですぐに協力を申し出た。医療事故自体は不幸な出来事だったがこれをきっかけに「患者さま図書室」ができることになった。

2005年12月から準備に入り、2006年6月開設にむけて運営責任者の副院長、看護部、総務課、資材課、医学図書館の職員が参加し開設準備会を開催し、具体的作業に入った。開設準備会のメンバーの中には患者用図書室の必要性や具体的なイメージがわからない者もいた。医学図書館からは先行図書室の事例を提示するとともに、我々が作成した「患者さま図書室」案を紹介し、メンバーの理解を深めるとともに備付資料、設置機器、書架・備品、スタッフなどについて提案した。狭いスペースではある

*Noriko ENDO : 〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-7-1.

Tel.03-5339-3747 Fax.03-3342-6168 endo-n@tokyo-med.ac.jp
(2007年2月28日 受理)



が資料だけでなく PC 端末、プリンター、複写機の設置、常駐スタッフの必要性について説明し、理解を得た。

設置機器、書架・備品、スタッフ、院内の調整などについては病院の各担当部署が担当し、資料の収集・整理については医学図書館が担当した。

3. 目的・方針

図書室の目的と方針を以下のように確認した。患者、家族の方々に病気や体について医学的に信頼できる情報を提供し、精神的な援助となる場とする。ただし、特定の治療方法を推薦したり、個人の医療相談は受けない。備付資料はこの目的に合う最近の資料、刊行物で一般書店では入手しづらい専門書でありながら非医療従事者でも理解できる資料、インターネット、持ち帰り可能なパンフレットを提供し、一般書、闘病記、雑誌、ビデオなどの AV 資料は提供しないことにした。

利用者は入院・外来の患者、家族、その他として特別な制限はしない。開館は月曜日から金曜日、10:00～16:00 までとした。利用は閲覧のみとし、貸出は行わない。インターネット利用、プリント、室内資料のコピーはすべて無料とした。専任職員による運用とし、明るく機能的な図書室の開設をめざした。

4. 資料

資料は医療情報のみとし、看護学校の教科書レベルを基本に患者図書室マニュアル³⁾や先行図書室の蔵書リスト⁴⁾などを参考に選書した。また学内の教職員に図書・パンフレット類の寄贈協力を依頼した。開設時は購入図書 202 冊、寄贈図書 230 冊であった。その後は随時必要図書を購入し補充しているが、教職員へも引き続き寄贈をお願いしている。2007 年 1 月 31 日現在の蔵書数は購入 312 冊、寄贈 289 冊である。開設時、それ以後の資料

購入の予算額は決まっておらず、購入希望リストを医学図書館が作成し、副院長の承認を得た上で資料課が発注・納品している。2007 年度は資料購入費として 30 万円の予算を計上している。

整理は医学図書館と同じ図書館管理システムで登録し、分類も医学図書館と同じ NLM 分類としたが、ラベルは利用者にわかりやすい表記（例：WK810 糖尿病など具体的に内容を表示）とした。OPAC 上では「患者さま図書室」と表示される。

パンフレットは看護部・薬剤部に依頼し、学内作成、製薬会社作成のパンフレットを用意した。項目ごとに分類し、項目別ファイルボックスに入れ、持ち帰り自由とした。開設時約 170 種類のパンフレットを用意した。その後の収集も看護部・薬剤部の目を通すことによって提供内容の質を保っている。

5. 機器・備品

閲覧用机・書架・事務用机など備品については木製で統一し、壁・カーペット・イスなどの色彩もやわらかく明るいものに工夫した。

利用者用 PC は東亜電子工業製「NET BOOTH」を採用した。「NET BOOTH」は電源管理、使用履歴消去及び復元機能がついている。1 回の利用時間は 10 分に設定されているが利用者による操作で延長も可能である。インターネットの利用は医療情報サイトに限定し、利用者には設定変更ができないようにした。医療情報サイトについては医学図書館で選定し項目ごとにリンク集を作成し提供している。「NET BOOTH」は本来課金用 PC であるが「患者さま図書室」での利用は無料のため課金設定の変更を依頼した。セキュリティの関係で学内 LAN とは接続していない。利用者用 PC からは OPAC の利用はできないが業務用 PC は LAN と接続しており必要に応じて図書館のホームページから OPAC を含む各種のサービスを提供できる。利用者用 PC はレンタルとし、管理も業者に委託している。

6. 職員

専任の職員 2 名が午前、午後交代で終日勤務している。東京医科大学の関連会社より派遣されている。公立図書館勤務経験の長いベテランの方と医学図書館で 2 年間夜間アルバイト経験のある方をお願いしている。利用者のサポート、パンフレットの整理・管理、インターネット検索の手伝い、プリント、コピー機の操作などに対応している。その他に利用統計、参考業務連絡票を作成して

いる。利用者から質問されない限り職員はこちらから積極的な対応はしないようにし、ただし親切にところがけている。

図書やインターネットで得られる情報は正しい情報であっても必ずしもその患者さんの状況とは一致するものではなく、あくまでも情報の一つとして理解していただくよう配慮しながら対応している。

7. 利用状況

利用開始から8ヶ月が経過し、開館日数163日、利用者総数2,349人、一日平均14.4人の利用があった。2006年6月から2007年1月までの利用統計をみると開始から3ヶ月は職員の見学が多かったが最近落ち着いてきた。利用者内訳では外来、入院ともあまり差がない。時間帯では10:00-12:00、14:00-16:00がほぼ同じで12:00-14:00が少ない(図1, 2)。

利用者から受けた質問などを参考業務連絡表に記入し、今後の所蔵資料の参考にしている。8ヶ月で94件の連絡表を作成した。内容をみると医療情報や当院の医師についての質問が全体の約60%、そのほかが約40%となっている。そのほかの中には一般書の閲覧希望、所蔵資料の貸出希望、所蔵資料についてなどのほかに病院周辺の地図、不動産屋、ホテル、散歩コースについてな

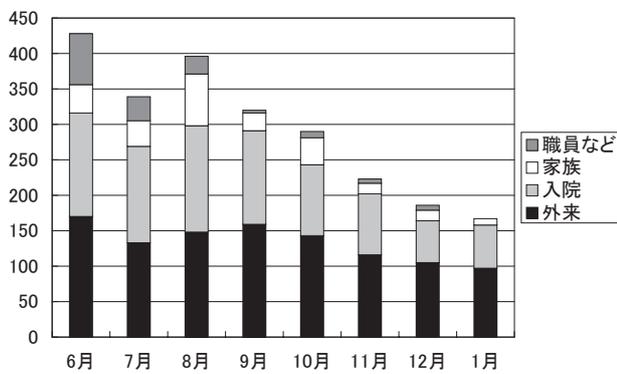


図1. 利用者数 2006/6 - 2007/1 (月別)

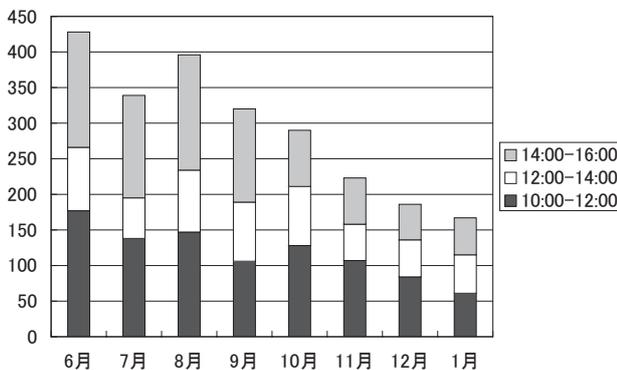


図2. 利用者数 2006/6 - 2007/1 (時間帯別)

ど予想外の質問もあった。

Ⅲ. 今後の課題

利用者からは「明るくてきれい」、「職員に親切にしてもらった」などおおむね好意的な感想をいただいているが、多くの方からスペースについて「もう少し広いといいですね」という率直な感想を頂戴している。車椅子の方、介護者と一緒に来室される方、点滴ポールを引いてくる方など患者さんの動作には健康な人以上のスペースが必要であり、利用している資料への他人の視線をさえぎる配慮も必要である。利用者が気兼ねなくもう少しゆっくりと本を読むスペースが必要である。また、雑誌・視聴覚資料の設置なども進めたいがスペースがネックになっている。是非とも病院側の理解を得てスペースの拡大を図らなければならないと考える。

患者用図書室において利用者への行き届いたサービスを提供できるかどうかは職員の資質や常駐職員の有無も重要なポイントである。職員の対応態度次第で図書室の評価が上下すると言っても言い過ぎではない。現在は恵まれているが今後とも優秀な人材の確保、日常業務を通して患者図書室員として利用者に接するマナーの徹底、医学知識の学習などが必要となってくる。

利用者は医療情報ばかりでなく当院の医師や診療内容についての情報を求めて来る方も多い。図書室内にある資料をよく知ることも大切だが、当院ではどんな治療が行われているのか? どんな医療機器が備わっているのか? 医師の得意分野は? またわからない時はどこに連絡をしたら情報を得ることができるか? など当院のことを知ることも大切である。医療情報のみならず自分の病院についてもアンテナを張ることが重要である。また教職員からも情報を得ることが出来るように学内への広報活動も必要である。「東京医科大学報」(月刊)への掲載、学内事務監督者研修会での発表などを通して理解を深めるようにしている。

現在は必要に応じて医学図書館から副院長や各部署に報告・連絡・相談をして運営しているが、今後の運営にあたっては計画的な予算確保、運営委員会の設置など継続的に運営を支える体制作りが必要である。初年度である今回は医学図書館の希望したものはすべて整えることはできたが、継続的な予算の確保は必須である。資料も新しいものを用意し、常に更新することも念頭にいたってはならない。予定したサービス開始期日までに時間がなかったため、実務が優先して体制作りまでは至らなかった。定期的に会合を持ち経過報告、各係との連携を

とりながら活動していくことがよりよいサービスにつながっていくと考える。

最近公共図書館で医療情報を収集、提供するところも出てきている⁵⁾。病院にある患者用図書室という地の利だけを生かすのではなく医学図書館がバックについているということを生かし、公共図書館ではできないより専門的な情報の提供をしていかななくてはならない。図書室の資料より専門的な情報を必要としている利用者には迅速に医学図書館がサポートするようにしたい。これまでも例えば腫瘍マーカーのガストリンペプチドの概略と基準値について質問されたが図書室所蔵の資料には掲載されていないため医学図書館から資料を持参したこともある。また日本肺癌学会に参加したいので日程表を見たいとのことで雑誌「肺癌」を持参し、家族の方に利用していただいた事などがある。医学図書館と「患者さま図書室」との連携プレーは必要不可欠である。

これからも医学図書館の資料を活用し医学図書館員としての経験を生かし、医学図書館全体として積極的に協

力していくつもりである。利用者からの「患者さま図書室」に対する評価が高まることで病院の評価へ反映されていくと考える。今後も担当職員、関係部署の協力を得ながら「患者さま図書室」を発展させていきたい。

* 2007年4月1日より開館時間が9:30～16:30(月～金)に変更になった

参考文献

- 1) 桑原文子. 「からだ情報館」: 患者への情報支援. 医学図書館 2005;50(3):181-90.
- 2) 山室真知子, 戸津崎茂雄, 奈良岡功, 平山正実, 嶋崎ひとみ, 伊勢美子ほか. 第5章. 医学情報サービス. 全国患者図書サービス連絡会編. 患者さんへの図書サービスハンドブック. 東京:大活字;2001.p.209-308.
- 3) 患者医療図書マニュアル編集委員会編. 患者医療図書サービス. 東京:病院図書研究会;2004.
- 4) 飯田育子. 患者図書館「いきいき健康図書館」の開設. 全国患者図書サービス連絡会会報 1999;6(1):3-14.
- 5) 図書館で病を学ぶ. 日本経済新聞 2007年2月1日;夕刊.

Patients' Library in the Tokyo Medical University Hospital

Noriko ENDO

Tokyo Medical University Library. 6-7-1 Nishi-Shinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo 160-0023, Japan

Abstract: The patients' library was opened in the Tokyo Medical University Hospital in June 2006. The medical library staff cooperated with the hospital staff to open the patients' library. This paper gives an outline of the patients' library and details of its establishment, the cooperative effort, and it reports on the present situation of the library. In the six months during which the library has been open, we have found some problems and we describe our future plan to cope with

those problems. The medical library wants to further support the patients' library by using the resources and experiences of the academic library.

Key words: patients' library; medical information; medical library

(*Igaku Toshokan* 2007;54(2):172-175)